

大西秀之著

『技術と身体の民族誌——フィリピン・ルソン島 山地民社会に息づく民俗工芸』

昭和堂、2014年、6,600円＋税、288頁

中村真里絵

本書は、フィリピン・ルソン島の山地民社会における民俗工芸、土器作りと機織りの技術的实践に関する民族誌である。

著者である大西秀之氏は、本書よりも前に、博士論文をまとめた著書『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』（2009年）を同成社から刊行している。著者の研究歴を知らずに本書を手にとった方は、フィリピンの民族誌の著者がアイヌ文化研究者であることに驚きを禁じ得ないだろう。あとがきで述べているように、著者は、北海道やフィリピン、現在では北東アジアなどにおいて調査をおこないながら、先史人類学・考古学、そして文化／社会人類学など、複数の学問領域を横断した学際的な研究を精力的に展開してきた。近年は、考古学的民族誌研究に関心をよせる考古学者や人類学者とともに研究会や学会のセッションを企画・組織し、人びとがモノをつくりだす行為や技術を主な対象にして、考古学と文化／社会人類学を架橋するような研究について成果を発信している。

本書には、著者の幅広い調査研究のなかで培ってきた経験と学識があますことなく発揮されており、フィリピンの民俗工芸という限定的な技術的实践の場を描きだすだけでなく、それをもとにして、クローン技術などの最先端の近代テクノロジーをも射程に入れながら、人類学的な理論にむすびつけて技術的实践を論じている（第7章）。本書は、考古学や人類学に限らず、近代科学や科学技術社会論（STS）など幅広い領域の技術的实践について関心をもっている方にもぜひ参照してほしい一冊である。

評者は、タイ東北部の焼物産地をフィールドにし、職人が焼物を介して形成する社会的な関係に注目して文化人類学の研究をおこなっている。焼物作りの技術的实践やそれにかかわる身体技法を研究主題としているわけではないが、文化人類学におけるモノ作りを対象とした民族誌記述の可能性を念頭において本書を検討したい。

本書は、以下の7章で構成されている。

第1章 技術をモノ語る苦難と悦楽

第2章 技術を語る民族誌の新たな地平

- 第3章 社会に形作られた土器製作者の身体
- 第4章 土器製作者の誕生とジェンダーの再生産
- 第5章 社会的実践としての工芸技術の変容
- 第6章 市場経済による伝統工芸の再生
- 第7章 民族誌から展望する技術研究

ほとんどの章は、著者がすでに発表してきた8編の論稿をもとに加筆修正したものである。それぞれの章は、関連づけてひとつの民族誌として読みすすめるおもしろさもあるが、それぞれを独立した論考として読むと技術研究の理論的な展開のひろがりを実感することもできる。その内容は以下の通りである。

第1章では、文化／社会人類学における技術をめぐる研究の学説史を整理したうえで、技術が物質文化の一部としてみなされてきたことを、人類学の技術研究が停滞した理由として指摘している。その背景として、ポストモダニズム思想によってもたらされた言語論的転回の影響が民族誌的記述におよんだことを述べる（4-12頁：以下数字のみ記載）。これにより文化／社会人類学の言語偏重の傾向が過度にすすんだことを批判し、本書の目的を、「現地の人びとの実践が形作る——言語のみでは描ききれない——社会像を描出」（20）し、「実践の非言語的側面からのアプローチによる民族誌的調査・研究の可能性の追求にある」（21）とする。また、このことを論じるために、生業／生産活動を物質的環境のなかの特定のモノに働きかける実践とみなし、本書では、土器作りと機織りが選ばれたのである。

第2章では、本書の理論的・方法論的視座として、フランスの社会学・人類学における技術研究や英米のプロセス学派による民族考古学の成果を参照し、技術の民族誌研究の可能性について論じている。なかでもA・ルロワ＝グーランが提唱したシェーン・オペラトワール論は、人類学と民族考古学という二つの分野の結節点にあたり、「技術的实践を、さまざまな環境的・社会的な制約と関係性の下、不可逆的な時系列のなかで展開・配列される一連の動作として理解する」（44）ことから、本書の追求する技術的实践を理解するうえで重要な理論として注目する。

第3章と第4章は、ルソン島北部のコルディリエラ地方のカンカナイ社会の土器作りを取り上げている。第3章では、従来の観察や聞き取りに基づく調査では、土器製作者の身体が保持する知識や技能にアプローチするのは難しいという課題をふまえ、著者自身が技術を習得し、調査地の土器作りに参加することにより、言語化できない技術的側面に迫ろうとしている。著者が、土器を作る際に、製作者たちと異なる作業姿勢をとっていると、彼女らと同じような作業姿勢や身体所作を促されるという経験をする。その身体感覚を覚えると、その他の姿勢で作業をするのに違和感をもつまでになる。こうした経験から、作業姿勢や身体の使い方は土器作りの伝習という文化的要因のなかで培われてきたものであり、知識や技能を発現する際、媒介となる土器製作者の身体は文化によって規定されていることを明らかにしている。

第4章では、土器作りの実践を通じたジェンダーの再生産について論じている。カンカ

ナイ社会において土器作りは女性の仕事である。その習得過程は、子どもの時に「母親や隣人などの熟練者が土器作りを行う横で、粘土遊びをしたり、その作業の手伝いをさせられた」(124) 経験から、土器作りに必要な予備知識や基礎技能を身に付けたうえで、「見よう見まね」で学んでいく。ジェンダーが未分化な幼年期は性別を問わず作業に関与するのにかかわらず、男の子は成長するにつれて、「女性らしさ」を象徴する特有の身体所作や動作で実践される土器作りにかかわらなくなっていく。著者は、これらの点をふまえ、土器作りの学習と実践を通してジェンダーが再生産されていくと考察する。

第5章と第6章では、コルディリエラ地方の機織りを取り上げている。第5章では、マウンテン州のなかでも機織りが盛んな3地域の事例から、産業化にともなって、女性の仕事である機織り技術の実践や伝習がうける影響について論じている。当該地域においては、従来「腰機」が家の軒下などで使用されていたが、産業化の進行にともなって、機織りが組織化され、技術的難度が低く、生産性の高い「高機」が導入される事例もある。その高機は、複数の織工と一緒に作業をする工房で使用されている。これにより、これまで「社会の営みのなかに埋め込まれていた機織りの伝習・実践が、その従来の場から切り離され」(173)、「機織りが果たしていたジェンダーの再生産は、不可避に終わりを告げるだろう」(173)と展望を述べている。

第6章では、コルディリエラ地方の棚田が1995年にユネスコの世界文化遺産に登録されたことにより、国際観光地化がすすむなかで生じた織物の市場経済化について論じている。当該地域の機織りは、国際市場と接合することによって、織物に伝統工芸品という価値を付与し、新たな商品開発がすすむなかで、産業として維持されることになった。こうした動向は、当地の人びとが織物を文化「資本」として認識することにつながり、「新たな社会や文化を再生産する原動力」(218)となることを指摘している。

最終章(第7章)では、改めて言語と技術の関係性の議論に立ち返り、民族誌フィールドから近代テクノロジーへとむすびつく技術的实践について論じる。本書で議論されてきたように、民族誌のフィールドにおける技術は言語化されない領域において学習され、実践されてきた。一方、現代社会が立脚する近代テクノロジーは、技術と技能の分離がすすみ、技術の言語化・マニュアル化が推進されてきた。しかし、言語化・マニュアル化がすすめられたとしても、言語化が困難な領域として技能は残りつづける。その例として、最先端医療の場の「神の手」を持つ名医や素粒子ニュートリノを観測する装置カミオカンデの最重要器具を覆うガラス筐体をつくる「ふきガラス」職人の存在をあげている。このように、「民族誌フィールドで実践論として読み解く技術研究は、社会科学の多様な議論に参画し貢献しうる可能性を孕むもの」(246-267)であると総括する。

以上のように本書は、「徹底的に現地の人びとの技術的实践にこだわり、そこで展開されるプロセスを読み解いてきた」(239)といえるだろう。それは、技術的实践には、言語ではアプローチできない領域が存在するからである。本書が提示したアプローチは、評者がフィールドとしているタイの焼物産地においても可能である。さらに、その射程は、民俗工芸に限らず近代テクノロジーにいたるまでの、現代社会におけるあらゆる研究対象に援用することも可能であるように思われる。だが、ここで想定されている対象において、

言語でしかアプローチできない領域がどのように重なっていくのかについては明記されていない。本書の企てからはずれるかもしれないが、例えば、技術を行使する担い手の経験や生き様、そしてその人が背負ってきたかもしれない社会的な差別や排除の語りなども、技術的实践を理解するうえで無視できない側面ではないだろうか。

これに加えて、本書を読了して感ずるのは、フィールドにおいて技術的实践に携わっている人びとの姿以上に垣間見える著者の姿である。「そこにある日常生活を、どう自分自身が読み解くか、または読み解けるのか」(270)という問いに絶えず自問自答しながら、研究対象と格闘しているその姿は、技術の言語化できない領域に迫ろうとする、本書において終始貫いた真摯な姿勢にも重なるものである。しかし、このことは、そこに住まう人びとが何を語り、その行為をどんな考えのもとに実践しているのかを記述し、理解しようとする、言語偏重の民族誌に慣れてきた読者にとっては、ある種の読みづらさを感じさせる。その理由は、著者が言語偏重主義から脱出しようとするあまり、インフォーマントによる行為や事象への認識についての記述を避け、それにかかわる議論に踏み込まなかったことにあるだろう。

本書のもとになるデータは、1996年3月～7月の5か月間におよぶ調査期間のなかで収集されたものである。文化人類学を専攻している学徒の多くが、一年以上にわたって長期的なフィールドワークをおこなっていることと比較すると、その調査期間は短いといえるだろう。本書を民族誌として捉えた場合、技術をとりまく民族性や地域性、人びとの生活に関する記述が少なく、物足りなさを感じてしまうのは、そうした限られた期間のなかで調査をおこなったことによるものと考えられる。しかし、著者はその期間で、技術的实践の非言語的な領域を対象として、調査目的に見合った質の高いデータを収集し、精緻な議論を積み上げている。これがもし、より長期の継続的な調査に基づくものであったら、どのような研究の展開があったのだろうかと期待をこめて想像してしまう。後日談として、土器作りが消滅してしまったという一節が出てくる(271)。著者が本書をもって、フィリピンの山地民の研究に一区切りをつけようとしていることが、東南アジアにおいて調査研究する者として、惜しまれる。

最後に、評者が読了後も疑問点として気になったことを二点指摘して書評を終わりにしたい。本書の標題には「民族誌」と「民俗工芸」という二つのミンゾクが使用されている。一つ目の素朴な疑問としては、あえて、「民俗工芸」という表現にこだわったのには何か理由があるのだろうか、ということである。説明がほしかった点である。

二つ目の疑問は、本書で、土器作りと機織りという異なる民俗工芸の事例を、並列して取り上げていることにかかわっている。土器作りも機織りも、ともに女性の仕事であるが、調査時点でローカルな消費にとどまっていた土器作りは10年後には消滅してしまう。一方、機織りは、調査時点においても、観光地化にともない国際市場のなかに取り込まれ産業化を遂げつつあった。こうした違いは、粘土(土器)と繊維(織物)という物質性の違いと密接に結びついているだろう。著者は、緻密に技術的实践を記述することを試みていることから、それぞれの物質性にも精通しているものと思われる。だが、本書のなかでは、物質性の違いが技術的实践の場において、どのような差異や共通性を生み出して

いるのかについて、ほとんど議論されていない。これらの物質性の違いは、産業化を方向づける要因になったと考えられるが、技術的实践を論じる際には、さほど問題にならないのであろうか。しかし、以上の疑問も、本書の全体の趣旨と照らし合わせれば、いかに些細なことであるかが了解されるだろう。

本書は、ある地域で実践されている技術の詳細な記述に陥ってしまうことはなく、人類にとって技術とは何かという、普遍的なテーマを希求する民族誌の可能性を拓くものとなろう。今日の人類学の潮流のなかで、あらためて技術研究に取り組む意義と展望を示した本書は、あらゆる技術的实践の場において、領域横断的な研究をめざそうとする人にとって示唆的な書である。